

飽くなき挑戦者 ——池永陽平

全国352団体が加盟している社会人野球の中で、32チームだけが出場を許される都市対抗野球。はるかなる頂を目指して、ここまで登りつめてきたアスリートの軌跡にせまる。



最終目標に向けて

「夢 はプロ野球選手」。野球好きな子どもなら一度は考えたことがあるこの夢を、ずっと全力疾走で追いかけている選手がいる。社会人クラブチーム、伯和ビクトリーズ（東広島市）に在籍している池永陽平さんだ。

8月29日、昭和2年から続く都市対抗野球が東京ドームで開催され、出場した池永さんが大活躍を見せた。7番二塁手として起用され、2回に先制の2点ホームランを放ったのだ。目標だった都市対抗野球での活躍に「自然とガッツポーズができました」と池永さん。

チームは今まで、この大会に4度の出場を果たしているが、いずれも無得点で初戦敗退。3年連続5度目の挑戦にして、チーム初得点と初勝利に結びつく勢いを、池永さんの活躍で手に入れた。

試合を観戦していた父・武義さんが「いつも冷静な息子があんなに大きなガッツポーズをしているのを初めて見ました」と話す。中学卒業後、親元を離れ、野球一筋で幾多の困難を乗り越えてきた。これまでの苦労が実を結び、目標をまた一つクリア。最終目標へ大きく前進できたことによる、喜びと安堵が混じり合った渾身のガッツポーズだった。

積み重ねられた努力

甲子園出場のために、15歳で柳川高校へ進学。「両親と離れて、初めての寮生活やきつい練習、人との付き合い方などすべて不安でした。けど、甲子園に一番近いと思って自分で選んだ道。途中で投げだそうとは思いませんでした」と当時の心境を語る。「ただ、もう一度高校生に戻って、最初からするとしたら耐えられないかもしれません」と笑って答えた姿は、当時の厳しさを物語っていた。

名門野球部に集まった部員数は約百人。先輩にも後輩にも負けられない戦いが、常に繰り返される下克上の世界でも心が折れることはなかった。夢を追いかけるうえで、第一目標として掲げていた甲子園に懸ける熱い思いで、不安を感じ、ひるんでいる暇などなかったからだ。

高校時代、一番記憶に残っているという、3年生の春に開催され



投手との駆け引きで球を見極めて打つ。迫力の打撃シーン。

た九州大会の準決勝。そこでサヨナラヒットを打ったのが池永さんだ。チームは勢いそのままに、見事優勝を果たし、九州の代表として、念願の甲子園の土を踏むこととなった。

卒業後、岡山商科大学へと進んだ。そこで目標は「大学日本一を決める場所、神宮球場へ行くこと。そして、中国6大学野球でベストナインに選ばれること」。

大学時代は高校時代に培ったこ

弱点を生かす

とが生かされた。これまでの苦労や経験は、池永さんを決して裏切ることにはなかったのだ。入部してすぐに才能が見いだされ、1年生の秋にシヨートのポジションに抜てき。その後はポジションを誰にも譲らず、不動のものとした。

中国6大学の選抜チームのキャプテンに選ばれるなど、輝かしい成績を残した大学生活。神宮球場へ行くことはできなかったが、もう一つの目標であったベストナインには見事選出され、中国6大学野球のナンバーワンシヨートになった。

「わたしの野球スタイルは、打つ

て、走って、守って」。

身長は171cm。幼いころから小柄だった池永選手の持ち味は、俊敏に動ける体格を生かした機敏な走塁と華麗な守備。そして球に逆らわず、右に左と器用に撃ちかわける打撃テクニクだ。

抜群のセンスを発揮している現在の左打ちの打撃スタイルは、小学生時代の監督の助言がきっかけだった。「体が小さい分、パワーがなかった。けど、大きい人には負けたくなかったから、人一倍努力しました。休みの日でも鏡の前で素振り。足には自信があったのでそれを生かすことができるこのスタイルを、絶対ものにしたかった」と当時を語る。

右打ちから変えた当初は、きこえないスイングだったが、高校生の時には完ぺきに身に付けていた。コンプレックスに負けず、逆に弱点を生かす方法で、長所をより伸ばした。このことが現在活躍している池永選手を作り上げたのだ。

編集を終えて

今回、5人のアスリートに取材をさせていただいた。その中で共通していた部分、それは「夢や目標に向かってチャレンジし続ける」ことだった。今の若者の生活は、ゲーム感覚で、くやしいことがあっても「リセット」ですませる生活が多いとよく耳にする。「がんばる」や「耐える」という部分が欠けているのかもしれない。そんな中、スポーツを通して「がんばる」や「耐える」ことを学ぶ大切さを、5人の経験が教えてくれた。自分の思い通りにならないこと、悔しかったり、悲しかったりを経験しながら、自分ひとりではどうにもならないことや人とうまくやらないことなど、人間を形成する上で重要な部分をスポーツから学んでいたからだ。総務省の調査で、一週間のスポーツ時間が最も長いのは、男女とも60歳代だと結果が出ている。若い世代で、スポーツをする人が減少しており、スポーツは「見る」もので「する」という感覚ではなくなってきているのだ。たしかに、テレビで一流の選手がプレーしている所を見ると、興奮や感動を与えてもらえ、満足してしまうかもしれない。しかし、礼儀やコミュニケーション能力、体力や健康など、社会で生きぬく能力はテレビを通してでは得られない。心身を共に成長できるのは「する」ことでしか手に入らない貴重なものなのだ。今回の取材は、スポーツを「する」魅力を再発見できた価値ある体験となった。（久原）



池永 陽平 Profile

いけなが・ようへい ● 福智野伊方出身。兄2人の影響で、小学校1年生から野球を始める。小学生の時は肩がよかったことから、ピッチャーとして活躍。中学生になって、硬式野球チームの鷹羽YKボーイズに入部して内野手へと転向する。野球部を引退してすぐ、恩師が監督をしていた野球チームで練習中の所に、柳川高校の監督が来ていたことがきっかけで、特待生として柳川高校へ進学する。